

# 生涯学習としての音楽教育に関する基礎的研究 I

Fundamental Investigation of Musical Education  
throughout One's Life I

吉名重美  
Shigemi Yoshina

## I はじめに

音楽は人間的な行為として普遍的なものであり、幼児期からの訓練・学習を積んだ人にとって、その技量は万人に一生涯“生きがい”として存在すると考えられる。そして人生の役に立たせなければならない。どの年齢の人にとっても、音楽に接することは、楽しい、且つ高揚した気分を与えるものではないだろうか。しかしその一方では、音楽を職業としない成人の場合、音楽に浸っているゆとりがないというのも現実ではないだろうか。音楽に内在するエネルギーを我々の現実の世界に、どのように取り入れていけばよいのかを考察したい。そして現代においてそのエネルギーを最も必要とするのは、高齢者の生涯学習ではないかと考える。つまり、我々にとって“生きがい”をどのようにとらえるかという観点からも、重要なことである。

核家族化と言われる現在、わが国は今や高齢化社会を迎え、あらゆる面で高齢化対策が考えられてきている。特にわが国を代表する高齢者県の一つである島根県では深刻な問題である。過疎化の進んだ地方都市においても三世同居が多い。筆者が指導している100人近い学生のアンケートから見ても、5割以上の学生が高齢者と同居していると回答が返ってきた。高齢化社会を迎えている先進諸国では、高齢者の精神衛生面の向上に目を向けなければならない。経済的に豊かになり、娯楽、生活のゆとりとしての生涯学習が考えられる。以上の事を鑑み、本研究の目的は生涯学習としてのピアノ教育、特に高齢者へのピアノ指導の実践・研究を試みるものである。

人間の学習・成長は一生涯継続する事が可能であり、それは絶え間なき努力の結果として生まれるものである。音楽の生涯学習的価値は高齢化社会の到来と共に、趣味的な音楽から“生きがい”としての音楽的接触を、考えなければならないのではないか。人は良い音楽を聴けば楽しくなるのが自然である。高齢者においても当然のことであろうと思う。

日本において鍵盤楽器、特にピアノは戦後、我々の一般家庭に普及してきた。そして現在では一世帯に一台の所有となってきたと言っても過言ではない。しかしながら、そのピアノが十分に利用・活用されている家庭は少ないと思われる。高齢者と同居の家庭において、ピアノを子供が習った折、その高齢者が心を動かさせられることは多いと考える。多かれ少なかれ、幼児・青年期に音楽によって影響を受けた人は、身体的、精神的、情緒的に、音楽によって精神の生きがいを求める事ができると思う。このような理由から、社会との接触、特に我々指導

者と高齢者の音楽を通じた接触が重要であると考え。

高齢者にとって、音楽の指導状況はどのような現状であろうか。公民館、福祉センター等で集団で習う種々の趣味的活動が存在する。集団でのレクリエーションとして、体を使った高齢者に対する肉体・精神の活性化のための活動が、種々の観点から行われている。しかしながら、体よりも手、指、そして知覚を用いた活動を好む人々が、多数存在することも事実である。生涯学習者の各人の個性も尊重されなければならないと考える。つまり、高齢者の個人レベルの趣味志向を取り入れた教育・実践を考えていく必要がある。以上の点を鑑み、筆者は大学でピアノ教育を教育・研究している者として、生涯学習の立場から高齢者へのピアノ学習の指導を立案し、「バイエルピアノ教則本」を教材として、ピアノ学習としての生涯学習を、一生徒の実践学習を通じてこの小論で考察し、それを基礎にして一般論について論及する。

この小論の最初に付け加えなければならないことは、高齢者という言葉の定義を明確に使うべきだと考える。しかしながら、現在我が国においてはこの言葉について不明瞭である。筆者は音楽教育に関する高齢者という場合、65歳以上の人々を意味する言葉として用いることをここに記す。

## Ⅱ 日本における成人の為のピアノ学習・教育の現状

明治初期、日本に西洋音楽が導入されて以来、1879年に東京芸術大学の前身である“音楽取調掛”が創設された折に、“指導書”という明確な意識の西洋スタイルの教則本がそこで初めて使用された。それから日本の音楽教育の先達と、海外からの演奏家達・理論家達が接触を繰り返しながら、西洋音楽は我々の生活の中に着実に根づいてきたといえる。そして日本ほど西洋音楽が繁栄・隆盛し、多くの人々に受け入れられている国はないといわれるようになった。大都市においては音楽会が毎晩開かれ、多くの人々が音楽鑑賞に出かけている。西洋音楽の隆盛は何も大都市のみに限られたことではない。日本経済の発展・高度成長と共に、社会全体における音楽的環境も急速に整備されたといっても過言ではないだろう。これらのことは地方にもおよび、地方文化の発展という見地から、各地に素晴らしい音楽ホール等が建設され、優れた性能を持つグランドピアノが各ホールに数台設置されるという状況になってきている。ここでは海外から招かれた演奏家の素晴らしい生演奏を、地方に在住していても接することができるようになった。

このように音楽を聴く機会は非常に多くなってきている。しかしながら、聴く人達が自分で演奏してみようとする時、そのような機会、特に社会人且つ高齢者の場合、生涯学習としての音楽教育はどのような現状に置かれているのであろうか。

筆者の所属する教育学部の変遷を考えても、ここ数年前より全国の国立大学に生涯学習センターが設置されるようになり、社会人の教育システムを生涯学習の場としてとらえるという考えが普及傾向にある。

一方、特に最近2、3年、生涯学習としての音楽教室、ピアノ教室が開かれるようになってきた。公的機関での開催は参考資料として巻末に述べた資料でも理解されるように、掛川、浦和、松戸市等で行われている。また楽器製造会社等が音楽人口拡大のための「大人のピアノ教

室」等を開催している。公共・企業を問わず、それらには主催者の予想以上に多く人々がレッスンに参加し、今後も増加傾向にある。

### Ⅲ 高齢者の実践記録

#### 1 研究の動機

筆者は20数年間教育・研究する場に居る。そしていつも念頭から離れなかった問題として、社会教育のための音楽指導者の養成を考えてきた。その理由の第1点は、後の章に記載する「国立大学と生涯学習」でも述べられているように、今後の大学教育の方向性に関連している。つまり、小学校以来の学年進行による教育システム（6、3、3及び4年一貫教育）から生涯学習システム（一生涯教育）への支援組織としての大学の役割が考えられる。

第2点は高齢化社会を迎えるにあたり、10歳代までは音楽的教育の訓練を受けた者も多数存在したはずである。しかしながら、特に女性の場合、20歳代、30歳代に結婚、育児と一生が進む間に（現代ではかなり状況は変わってきているが）、音楽との接触が次第に疎遠となる。50歳代を迎えた頃、そのような音楽教育を受けるとい社会環境の幅が、かなり減少されてきているといっても過言ではないだろう。これは生涯学習、高齢者の生きがいと声高に唱えている教育指導者の自己矛盾ではないだろうかと考えられる。

筆者は平成2年に、その当時4歳の女子及びその32歳の母親、そしてその62歳の祖母という三世代同居の親・子・孫と知り合う機会を得た。そして平成4年に当時64歳の祖母にピアノ学習を勧めてみた。勿論、筆者のボランティア活動の一貫として指導すると伝えた。しばらくの期間考えられて、「家にピアノがあるのだから、自分もやってみよう。」という答えをもらった。考慮期間中に以下のことを考えたと後日述べられた。参考・研究資料の為、ここに記す。

##### ① ピアノ学習の持続の可能性

ピアノ練習を始めるからには長続きしなければならない。途中で止めてしまうということになってはいけない。気持ちの上では元気であっても、年齢と共に体に様々な支障が現れてくるであろう。それをどう乗り切っていくことができるか。

##### ② 指の柔軟性

孫のピアノ練習を見、また聞きながら、自分もピアノを弾いてみたい。しかし年齢から考えてみて、指が動かないのではないか。

##### ③ 他者への配慮

他者への音の配慮をしなければならない。音楽会等の流暢によどみなく流れる音楽に対しては、何の不満も人は感じないかも知れないが、ぎこちない初歩の学習を他者が我慢できるか。

筆者は個人指導、集団指導における相違点の研究のため、このピアノ学習者の友人たちに声をかけてみてはという提案をした。しかしその回答は、祖母の友達の言葉を借りて述べれば、「ピアノの勉強なんて、とても、とても」、「楽譜が読めない」、「自分の体が動かなくなっているのに、まして指が動くわけではない」等であった。特に「ピアノの勉強なんて」という言葉の

中には、“ピアノ学習”がとても高尚なおけいごとという意識が存在しているように推察した。彼らにとって、茶道、華道と格式や形式を重んじる習い事よりも、ピアノという楽器が身近にありながら、しかしピアノは遠い存在であり、若い人達の為の楽器であるという答であった。

このピアノ学習者（祖母）がピアノ学習を始めてみようという返答の根底にあるのは、高齢者が孫に対して、自分も学んでいるという姿勢を見せること自体が、教育的効果を持つ事にもなっており、そこには、従来無視されがちであった高齢者の生きがいの別の存在意義を見いだす、ということではないかと筆者は推察した。

## 2 ピアノ学習者のプロフィール

ピアノ学習者のプロフィールを簡単に紹介する。

学習者は昭和2年7月生まれで、平成7年2月現在で満67歳である。ピアノ学習指導開始時は64歳であった。54歳まで小学校の教員をされていたが、現在は専業主婦である。この学習者の音楽歴について学習者自身の話をここに記す。

「教員採用試験（戦時中の採用試験は、その当時は検定試験という名称であったと述べられた）は、「バイエルピアノ教則本」から1曲を任意選択し、受験するのであった。その1曲のみを自己流で練習・勉強をした。系統的にレッスンをしなかった為、孫のピアノの練習を見ても、孫がどの部分を演奏しているのかわからない。どの部分を演奏しているのかを理解するために、音符を“点描画”のようにとらえ、音符が上行・下行しているかを理解していく。しかし孫が間違った演奏をしていても、どこを間違えているのかは理解できない。しかしながら孫のピアノ学習を観察していく過程で、音楽の楽典を少しずつ理解できた。教職についていた時代は、楽典等に理解度が不足していたため、メロディー伴奏には非常に困難さを感じた。」

## 3 実際の指導

### ① 指導期間

平成4年2月から平成7年2月までの3年間。レッスン時間は毎週1回、30分から1時間とした。しかし両者（先生と学習者）の時間的都合により、計画通りには進まず、結果的に平均して1ヶ月に2回となったが、「子供のバイエル」上・下巻はほぼ終了した。

### ② 使用教材

「子供のバイエル」上・下巻 全音出版社

## 4 指導方針

- ① ピアノ学習者の学習の持続。つまり無理のない計画性でピアノ学習者に精神的圧迫を感じさせないこと。

- ② ピアノ学習者に対する家族の配慮。
- ③ 孫、母親、学習者の精神的高揚の自発性。

## 5 ピアノ学習者の感想

3年前までは、白髪の自分が、ある機会からピアノ学習を始めることになるとは思ってもいなかった。外見だけでなく、頭の中身も白くボヤケている自分が、「本当にピアノを弾けるようになるのか。」、しかしその反面、「小曲でも演奏することができれば、どんなに楽しいだろう。」と思いながらも、ピアノ学習を始めることに躊躇しました。

幼少より音楽は好きであり、ヴァイオリンの音色に憧れを抱いていましたが、小学校入学の時、初めて入った教室で「オルガン」という楽器を知り、それは“驚き”でした。当時の歌の「鳩」「かたつむり」「桃太郎」「うさぎとかめ」等々のメロディーに聞き入り、大喜びで歌った事を覚えています。それ以来、「オルガン」の虜になり、「オルガン」が欲しい一心で、やっと4年生になって念願が叶いましたが、悲しいことに日支事変、女学校入学の年に世界大戦と動乱の時代が続き、結局、時勢柄「オルガン」も近隣に配慮し、内緒の小さい音で、自己流の探り弾きで楽しむ程度で終わりました。我々と同年代の人は、音楽に憧れを抱くものの、音楽を職業としない者は、多少とも同じような音楽に対する経過をたどっているのではないかと思います。

3年間（平成4月2月から平成7年2月）のピアノ学習を終えて感じたことの第1点は、楽譜を読むことの難しさです。我々の年代では、楽譜をきちんと読むということを勉強している人は少ないと思います。その上に、細かい小さな字の印刷物を読むということにかなりの苦痛を感じます。特に五線に記されている音符を理解することには努力が必要です。我々と同年代の人が何か楽器を学習するという場合、大正琴を練習している人が多いと思います。それは初歩の入門において、数字譜になっているため、初歩の導入が楽であると考えます。また自分が演奏してみたいと思う曲などの楽譜は、印刷されている音符が小さい為に非常に読みづらいです。ピアノ学習において使用した楽譜は「子供のバイエル」です。この本は音符、五線が大きい為、見やすいと思います。それ故、上巻は比較的楽に勉強できていったように感じます。しかし音符が少しずつ小さくなっていくにつれ、楽譜を読むということが困難になっていきました。しかしながら自分自身の楽譜に対する理解力と、学習進歩が比例していけば、ピアノ学習に困難さを感じることは少なくなっていくと思います。そしてひらがな文字をスラスラと読めるように、読譜力をつける方法を自分で考え、見つけていけば、ピアノ学習をしていく楽しさをより感じていけるようになるのではないかと考えます。そうしなければ、何年経っても入門の域から抜け出られないと感じました。

第2点は、我々の生活の中での音楽の占める比率です。ピアノを独り占めしている時間は、家族の中で一番長いのが自分であると思います。ピアノ学習を始めて、今ではピアノを囲んで合奏を楽しむ時、「聞くだけ」から「参加する」という状況になりました。「静」から「動」という積極性を感じていくようになり、皆に手助けされ、励ましてもらい、皆とともに音楽を楽しむながら学習するという、今までの平坦な生活から、リズムのある生活が少しずつできてき

たようになったと思います。最近特に音楽の果たす役割の大きさを感じます。

## 6 研究報告

「バイエルピアノ教則本」を指導・修了し、大人のピアノ学習者を指導する上の総体的な指導ポイント・注意ポイントを列挙し、報告・考察する。「バイエルピアノ教則本」の各曲についての指導上の留意点等は、紙面の都合上、次論文において研究することにする。

### ① コミュニケーション

学習者と指導者のコミュニケーションを充分に行うことが重要である。両者間のコミュニケーションから、レッスンの方針や学習者の音楽に対する理念・理想を模索していくことができる。特に大人の学習者の場合、ピアノに対する考え方や明確な目的意識を持っている為、指導者は学習者の理念を十分に理解する必要があると考える。

コミュニケーションの円滑の為、筆者はレッスン開始時に世間話をするを行った。レッスンを始めた当初は、この会話にかなりの時間を取る必要があると考える。特に今回のピアノ学習指導は、集団指導でなく個人指導である。両者間の意志疎通を会話を通して進行していくことが、相互信頼の指導・教育を行うためには必要である。またその時の会話・動作から、前回のレッスンからレッスン当日までの練習状態や体調を把握することができ、レッスンをスムーズに行えると考えた。その一例として、指導期間中にこの学習者は中耳炎にかかり、ピアノ学習に支障をきたした。特に中音域が聞き取りにくく、学習者自身が演奏する音が全体的に不透明感として耳に響き、練習・学習しづらいと述べられた。このような場合、どの音域での練習が耳に負担にならないかを模索し、指導を行った。この点は個人指導ということが利点となったと考える。つまり十分に会話（意志疎通）を行ったので、学習者の健康状態及び体調が把握できたからであると考ええる。

### ② 集中力

集中力を保つためにレッスン時間をどの位にするかということも、年少者のピアノ指導同様に考える必要がある。特に高齢者の学習者は、ミスのない演奏を常に行いたいという願望を持っている。当然のことと思う。しかしそのことばかりにこだわり過ぎて、いつも緊張の連続である。演奏をするという行為を楽しんでもらうことを前提としている為、常にリラックスして行うことを助言する。レッスン時間の中での緩・急・緩を用いて、注意が散漫にならないようにする。つまり適度の会話と演奏というパターンの繰り返しを行う。また特に年齢が高くなると目の疲労を感じられることが多い。この事は集中力維持ということに対しては難問であると感じた。

### ③ 言葉の問題

我々（指導者）は指導・学習する対象の年齢によって、言葉使いを変えていく必要があると考える。また「音楽家の言葉はわからない」でも指摘されているように、我々指導する者は、

抽象的な言葉を、ごく当たり前のこととして使っていくという傾向が見られる。高齢者の場合、これらについて言葉を変え、比喩を用いて説明をしなくても、長年の人生経験から理解される。従って、大人の学習者の場合、指導する人間の言葉の意味を、学生や年少者とは違って理解してもらうのは容易であると考え。つまり学生、年少者のピアノ学習者と比較して、抽象的な言葉及び音楽理論等に対しては理解度が優れている。しかしながら、音楽特有な言葉も社会的言葉の違いがあり、一方的なこちらの思い入れでの言葉使用の使用を我々は考えなくてはならない。学習者は人生経験が豊富であるということ、そして自己の確立された人であるという事実を、指導する側は常に忘れてはいけないと考える。

#### ④ 楽譜

ピアノ学習者が使用した楽譜の「子供子のバイエル」上・下巻は、「バイエルピアノ教則本」を子供用に編集された本である。音符1つ1つが大きく印刷されており、幼児が見やすい形にレイアウトされており、また段階ごとに、我々の馴染みのある小曲が編曲して挿入されている。

高齢者のピアノ学習においても、楽譜のレイアウトの配慮が必要と考える。筆者の「ピアノ教則本についての考察Ⅰ」でも述べたように、初心者のためのピアノ学習書は、現在日本において夥しい数の楽譜が出版されている。そして大人の初心者用の楽譜も最近では出版されるようになってきている。大人の初心者の中には「あの曲を演奏してみたい」、「あの曲をいつか演奏できたら」という願望がある。近年、「手軽に名曲を演奏」ということから、初心者でも演奏しやすいように編曲した作品の楽譜が出版されている。しかし、これらの楽譜は高齢者が見やすいようには配慮がされていない。また配慮されている楽譜は少ないと考える。

戦前から“バイエル”という名称の楽譜について、憧憬の念と、もう一度正確に学習したいという願望が、学習者に存在したこともあり、ここにこの練習楽譜を使用することにした。

通常、成人の場合、楽譜と目の距離はグランドピアノでは約50cm位、またアップライトピアノでは約30cm位ではないだろうか。そしてこの年齢の人は、おそらく大部分が老眼鏡を使用されているであろう。楽譜の譜読みに慣れていけば、音符の大きさが少しずつ小さくなっていても、それは自然に受けとめられていく。そのために、「子供の子バイエル」をこの学習者に使用した。楽譜についての学習者の意見を以下に記すと、

a. ピアノ学習の初歩の段階では、印刷されている音符が小さいと、楽譜が非常に読みづらい。特に1ページの中に数段にわたり大譜表が印刷され、そしてその譜表間が狭いと、1ページの中にたくさんの音があるという感覚を持ち、譜読みをする前から譜読が大変であると先入観を持ちます。

b. 左手、右手が同じ音型や平行に動く場合、左右を分けて譜読みを行わない。右手で演奏する音のみを譜読し、左手は右手と同じになっていると思い、譜読みの省略を行う。大人の知恵を使って読譜を行います。

以上をまとめると、音楽形式の理解等、楽典の理解も大人の知恵で理解していかれる。音符を視覚的にとらえて理解されるのである。しかしそのような譜読力がついていった段階でも、同じ小節数の作品であるが、譜面の印刷された音符の大きさにより、理解度が違ってくる。つまり楽譜作成のレイアウトによって、前述したように作品が困難であると感じたり、またあま

り意識しないという状態にもなる。レッスン期間の経過とともに、楽譜に馴れ、演奏することを楽しまれていった。「バイエルピアノ教則本」の後半部分になると、少しづつ譜読に余裕ができ、指導する側が楽譜に書かれていない伴奏を付けて合奏を行うと、学習者に伝わる音楽の楽しみが増加するため、読譜への意欲が感じられる。

#### ⑤ 宿題

指導方針の①と関連づけられると考える。ピアノ学習開始初期の段階では、宿題の範囲は決めないことが望ましいと考える。学習者自身が練習できる範囲までとする。過度に宿題を与えず、今までの生活のリズムを壊さない為である。あくまでも余暇に楽しみながら勉強をしていくということを前提にして行うことが大切であるとする。宿題の範囲を決めることで、「勉強をしないとレッスンに行けない。」そして「練習をしていかないと申し訳ない。」という精神的圧迫を避けることが大事である。

ピアノ学習が、自然に生活の一部（習慣性）として学習者の中へ根付いていき、学習のリズム（継続性）を掴むことができなければ、ある程度の範囲を決めてもいいのではないかと考える。

#### ⑥ 家族の配慮

この学習者の家族の場合、娘、孫は音楽演奏経験がある為、学習者の家庭での練習中に手助けしたくなる傾向があると考え、学習者が間違った演奏を行っていても、質問をされない限り、手助けをしないことの配慮を頼んだ。自発的な精神の高揚と精神的圧迫を与えないようにする為である。学習者自身も指導期間中に次のようなことを述べている。「練習をしている時、孫がそばに来ると精神的苦痛を感じる。自分の実力と孫の実力の差をはきりと意識する為である。あんな子供に負けるものかという気持ちが浮遊する。」

また高齢者が何か新しいものに挑戦しようとする時、家族の励ましが一番大切であると考えられる。「簡単に弾けないのだから、ゆっくり練習した方がいいよ」、「おばあちゃん、上手だね」と温かい励ましが大切と考える。

#### ⑦ 意欲

年少者のおけいこ事等の場合、しぶしぶ（意欲不足及び自発性の欠如）、親の意見・忠告に従う傾向が初期のレッスンに見られる。しかしながら、この学習者の場合、意欲不足という状態は存在しない。自分の意志が最優先されている。様々な社会経験を積んだそのことが、ピアノへ積極的に自発意識で学習意欲へと高められていると考えられる。

### Ⅳ 大学における生涯教育

#### 1 国立大学の担う役割について

現在の社会では「価値」は頗る多様化し、一概に定義づけを行うのは極めて難しい。しかし、



大別すれば、学術的、文化的価値と経済的価値になるだろうか。

大学の担うべき役割は、優れてこれらの価値と深く関わる。大学は研究と教育を行う所と、一般にいわれているが、研究とは発見・発明（広い意味で）を成果とすることで、それは取りも直さず、価値の創成である。勿論、研究の成果が価値の創成であるか否かは、その分野において、人類の幸福、地球環境、経済的な生活の質の向上、重要な心理体系への寄与、英知の喜びなど多様化した種々の要素による厳しい評価が要求される。

大学は客観的に、公平にこれらの価値の創成と評価をなすべき所だと考えてよいだろう。価値の創成と評価システムの中枢に位置づけられた大学では、創成され評価された価値を社会に拡散する事によって、社会に貢献し、また社会からのフィードバックによって、ますますその価値を高めることに努力を傾けることが望まれる。大学において創成された価値を拡散する努力の一環としての学習機会の幅広い提供を、国立大学としては、改めて強調したいものである。

現在のわが国の生涯学習ブームは、むしろ、1973年のOECDの報告書に述べられている*recurrent education*に起因するものといえよう。また平成4年5月に文部省高等教育局にリフレッシュ教育(*refresher education*) 企画官という官職も設けられたので、生涯学習、継続教育、リカレント教育、リフレッシュ教育といった概念が揃ったことになる。

生涯学習とは人々が生涯を通じて、各人が自発的に行うことを基本として行う学習活動の総体。家庭教育、学校教育、社会教育、職業訓練、企業内教育訓練などだけでなく、スポーツ活動、文化活動、趣味、レクリエーション活動、ボランティア活動の中で行われるもの。(生涯教育という用語も存在するが、学習者の視点に立つということを明確にするため、最近では、生涯学習という用語が一般に用いられるようになっている。)

一般社会では生涯学習といわれてブームになりつつあるのは、むしろ、いわゆるカルチャーセンターなどで行われている、教養、趣味、健康増進などの分野で、自己の充実を目指したり、生活の豊かさや生きがいを目的するものである。

以上は非常に示唆に富む内容なので「国立大学と生涯学習」より抜粋し、記載した。

## 2 個人の担う役割について

大学において研究・教育を行う我々が担うことができることは、非常に限られた範囲の生涯学習(生涯教育)支援への参加である。特に音楽の鍵盤楽器指導者としての筆者が、一般人に生涯学習(生涯教育)を試みる場合、それは次の形式に考案できる。

- 1.時間的な制約：先生と社会人(生徒)との相互の時間の調整。
- 2.学習場所：どこで指導するか。
- 3.内容：どのような教材を用いるか、また学習者の技量。
- 4.学習者の人数：個人指導か集団指導等。
- 5.ボランティア活動の限界。

以上、解決しなければならない個人レベルにおける幾多の生涯学習(生涯教育)についての困難さが存在する。それを我々は禅の言葉より借用して「考案」という問答によって、今後検討・研究する予定である。一部はあとがきで問題点として列挙する。勿論、筆者と学習者たち

の熱意が、それらを解決すると考えることが大前提である。この小論がその出発点であることを強調しておく。

## V あとがき

音楽の生涯学習的価値は、高齢化社会の到来とともに、趣味的な音楽から高齢者の生きがいとしての音楽的接触へと、カテゴリーを変換して考えなければならない。以上の観点を考慮し、次の事柄を更に今後の筆者の研究課題とする。

- ① 高齢者に対する個人指導に特有の指導上の問題点は何か。
- ② 高齢者に対する集団指導に特有の指導上の問題点は何か。
- ③ 高齢者指導に適した教材は、どのようなものが考えられるか。
- ④ 社会状況を鑑み、高齢者に対するピアノ指導を担える人材を、大学で育成する為に必要とされる指導概念・指導方法はどのようなものか、教材・資料統計の作成を試みる。
- ⑤ 大学教官と高齢者の音楽的接触の共有性の問題点は何か。

一方、20数年前に筆者は定時制高校において半年間であったが、年齢の幅のある学生を指導した経験がある。音楽の持っている様々な心理的、生理的、社会的働きを考えたが、当時は技量の点までは心が伴わないで教育活動を行った。その時の経験から、社会人を対象とした研究をしてみたいと思うようになった。しかしながら、近年、高齢化社会を迎えた高齢者と接してみ、高齢者が音楽について社会的背景としては、筆者よりもずっと経験豊富な姿にショックを受けた。つまり、音楽においても、社会経験との相加相乗効果を生む性格がある事に気付いた。しかし目を現実の音楽教育界に転じると、多くの音楽教育家は子どもの音楽の才能を伸ばす事に熱心なあまり、生涯学習としての社会的経験をつんだ高齢者の教育については、まだ十分といえ状態ではないと考える。

次に大学において音楽に携わるものとして、今後論及するべき、考えるべき課題を列挙する。

- ⑥ 高齢者との音楽的なふれ合い。
- ⑦ 孫、親、祖母の音楽、又は芸術を通してのコミュニケーション。
- ⑧ 世界の個々における高齢者と音楽教育、又は芸術の関わりからの福祉的側面からの考察。
- ⑨ ミュージックセラピーの観点から高齢者の音楽との関わりについての考察。
- ⑩ 大学の音楽教育における生涯学習支援プログラムとしての、多面的な指導・研究者の育成及び養成。

この小論の最後に、我々も自然の摂理としていつか年をとり、気力・体力・知力が衰えてくる。しかしながら、学習をするという気持ちが重要である。今回この学習者と“共に学ぶ”という時間を共有した。“共有時間と学習目的の一致”が、今後の我々の“生涯学習とは何か”という研究課題への答の一つと考える。

## Ⅵ 参考資料（都道府県・地方公共機関によるピアノ指導の生涯学習について）

以下の資料は、三団体により実効されているのを知り、手紙・電話で質問を行った。その問い合わせた結果に基づき、不統一であるが現況のまま載せることにする。

### 1 埼玉県浦和市（人口 43万1千人）

#### 「実年のためのピアノ教室」

趣旨：本教室は、生涯学習の一環として、高齢化社会に対応する市民の芸術、文化活動の一層の振興及びコミュニケーションを図ることを目的として開催する。

主催：浦和市教育委員会・（社）全日本ピアノ指導者協会

日時：水曜クラス（3クラス）計24回、木曜クラス（3クラス）計24回

1クラス1回50分レッスン、午前9時から正午まで

対象：市内在住の50歳以上の初心者

定員：36名（1クラス6人）応募者数が多数の場合は抽選を行う。平成4年度の定員は1クラス5名とし、6クラスを開設した（合計30名）。

会場：浦和市長中央公民館大会議室

応募状況：平成4年度は133名（市内125名 市外8名）男性13名 女性120名

平成5年度は153名（市内153名 市外0名）男性9名 女性144名

平成6年度は131名（市内131名 市外0名）男性19名 女性112名

平成7年度は128名（平成7年6月8日現在、締切は6月8日）

受講生の年齢別内訳：平成6年度の36名の内、50歳代は22名（男性2名、女性20名）

60歳代は12名（男性3名、女性9名）

70歳代は2名（男性0名、女性2名）

### 2 静岡県掛川市（人口 7万5千人）

#### 「生涯学習ピアノスクール」

趣旨：クラシック、映画音楽などなど、あなたの好きな曲、弾きたい曲が弾けるようになります。ピアノ技術を習得すると共にピアノを通して、心のゆとり、豊かさを感じていただきこれからの人生の活力となることを目的とした実年の方の為のピアノスクールである。

主催：掛川市教育委員会社会教育課文化係

内容：週1回、電子ピアノによるレッスンを中心とした楽しい音楽スクール

日時：週1回、計24回、午前中1時間

対象：市内在住の50歳以上のピアノ初心者の方

定員：15名（1クラス5名、3クラス）応募者数が多数の場合は抽選を行う。

会場：掛川市生涯学習センターリハーサル室

講師：全日本ピアノ指導者協会会員 “大人の方のためのピアノ指導者”

費用：24,000円（全24回の6ヶ月分）教材費は別に2,000円程度

応募状況：平成5年度は46名（男性3名 女性43名）

50歳代は32名（男性2名、女性30名）

60歳代は10名（男性0名、女性10名）

70歳代は4名（男性1名、女性3名）

平成6年度は22名（男性7名 女性15名）

50歳代は10名（男性0名、女性10名）

60歳代は9名（男性4名、女性5名）

平成7年度は15名（男性6名 女性9名）

50歳代は7名（男性2名、女性5名）

60歳代は6名（男性3名、女性3名）

70歳代は2名（男性1名、女性1名）

受講生の年齢別内訳：平成5年度の14名の内、50歳代は9名（男性1名、女性8名）

60歳代は4名（男性0名、女性4名）

70歳代は1名（男性1名、女性0名）

平成6年度の15名の内、50歳代は6名（男性0名、女性6名）

60歳代は6名（男性3名、女性3名）

70歳代は3名（男性3名、女性0名）

平成7年度の15名の内、50歳代は7名（男性2名、女性5名）

60歳代は6名（男性3名、女性3名）

70歳代は2名（男性1名、女性1名）

備考：掛川市の場合には新聞社数社により、数回にわたりこのスクールの内容等、及び発表会の模様が取材され、好評を博していると資料を送ってきている。

### 3 千葉県松戸市（人口 45万4千人）

「ピアノを始めたい人のための実年キーボード教室」

主催：松戸市教育委員会社会教育部公民館課

日時：週1回、計24回

定員：25名

講師：全日本ピアノ指導者協会

費用：50,759円（受講料、キーボード購入代、テキスト代）

応募状況：平成5年度は56名（男性2名 女性54名）

50歳代は41名（男性1名、女性40名）

60歳代は15名（男性1名、女性14名）

受講生の年齢別内訳：平成5年度の25名の内、50歳代は17名（男性1名、女性16名）

60歳代は8名（男性1名、女性7名）

## 引用文献

国立大学と生涯学習：国立大学協会 生涯学習特別委員会 平成5年5月発刊

## 参考文献

- 1 吉名重美著：ピアノ教則本についての考察Ⅰ：島根大学教育学部紀要 第22巻第1号  
(人文・社会科学編) 昭和63年10月
- 2 ロナルド・カヴァイエ、西山志風著：日本人の音楽教育 新潮選書 新潮社
- 3 森脇憲三著：音楽家の言葉はわからない 全音楽譜出版社
- 4 児玉邦夫・児玉幸子著：ファミリーピアノのすすめ 講談社
- 5 日本国勢図絵：国勢社 1995年版(第52版)
- 6 子供のバイエル：全音楽譜出版社
- 7 田丸信明：バイエルの効果的な指導法 東京音楽社

